

大谷學報 第二十一卷 第四號

源氏物語に現はれた神

多屋 頼俊

源氏物語は、その著作當時に於いて、一條天皇を始めとして、宮廷の間に廣く愛好せられ推賞せられたが、その後鳥羽、順徳の兩天皇が深く愛好せられた事は、八雲御抄や増鏡等に明である。後醍醐、後村上、長慶と吉野朝の天皇が三代相續いてこの物語を研究せられ、殊に長慶天皇は源氏物語の辭書「仙源抄」を御製作になつた事も、改めて言ふに及ばぬ事と思ふ。鎌倉室町の頃の歌人や連歌師は、この物語をその道の必讀書として、殆ど暗誦する程に讀んで居た事も亦周知の事である。^(註)江戸時代以後に於ける源氏物語の流行については、もはや贅言を要しないであらう。源氏物語は著作せられてから今日まで、殆ど一千年に近い星霜を経て居るが、何れの時代に於いても常に多くの人々に愛好せられて來たのである。蓋し多くの讀者を有するといふ點に於いては、源氏物語は古來のわが文藝作品中第一の

ものと云はねばならないであらう。従つて多くの讀者がこの物語から、意識的に無意識的に多くの影響を受けたであらう事も容易に推測し得る所であると思ふ。

さて源氏物語の宗教思想について見ると、人生無常の觀念が物語の全體に泌み渡つてゐる事、人生に於ける一切の事象を、宿世の因縁に依つて解釋しようとしてゐる事、物語に現はれてゐる多數の人々が出家の希望を抱いて居り、又多くの人々が出家をして居る事、而して殆ど凡ての人が彼岸の世界に憧憬して居る事等と思ひ合はせると、佛教の思想信仰がこの物語の根柢になつて居る事を容易に認める事が出来る。然し神祇に關する記述も、必ずしも少くは無い。依つて此處に神に關する記述を整理して、源氏物語には如何なる神が現はれてゐるか、神に對して如何なる觀念を有ち、如何なる態度をとつて居るか、また神と佛とを如何なる關係に於いて見て居るか等の問題について考察したと思ふ。

源氏物語の本文を引用する時には、日本文學大系本に依つて、頁數を註記する事にする。但し右本は上下二卷になつてゐるが、今は一々上卷下卷等と書かずに、單に卷名と頁數を記る事に止める。

二

源氏物語に現はれてゐる神々には、その御名の明かな神と明かでない神とがあり、物語の内容に深い關係のある神とさうでない神とがあるが、此處には先づ神の御名が明かで、且つ内容に比較的深い關係のある神について記るし、次に他の神々に及ぶ事にしよう。さて神名が明かで、且つ物語の内容に比較的深い關係のある神と云ふと、伊勢の大御

神、賀茂の大神、住吉の神及び八幡の神を擧げる事が出来る。この中、住吉の神と八幡の神は、既に佛教と習合せられた神として現はれて居り、伊勢の大神神と賀茂の大神は、佛教との習合を拒否せられる神として現はれて居る。

但し神佛習合の歴史を顧れば、伊勢神宮に於いては神佛習合の思想が最も早く現はれてゐる。即ち文武天皇の二年十二月乙卯(日廿九)に多氣太神宮寺を度合郡に遷した事實があるから、多氣郡の太神宮寺は文武天皇の二年よりも前に造られたものであり(紀續)、また稱徳天皇の天平神護二年七月丙子(日廿三)、朝廷は使を遣はして伊勢の太神宮寺に丈六の佛像を造らしめて居られる(紀續)。

賀茂神社の神佛習合は、文獻に見える所では平安朝に入つてからで、淳和天皇の天

長年間よりも前に、神戸の百姓が賀茂大神の爲に佛堂を造立して居たが、天長十年十二月に勅して「佛力神威相須尙矣。今尋本意事縁神力。宜彼堂宇特聽改建」と仰せられてあり(續日本後紀)、次いで仁明天皇の承和六年五月に三ヶ

日を限つて、「爲賀茂大神、轉讀金剛般若經一千卷」(同上)とあり、文徳天皇の齊衡三年五月には「請僧二百五十人、

於大極殿及冷然院、賀茂、松尾神社、分讀大般若經、限三日訖。攘災疫也」(文徳實錄)とあり、同九月には「請僧

於賀茂、松尾神社、讀金剛般若經、限三日訖」(同)等、神前讀經が行はれ、また清和天皇の貞觀元年八月には十

禪寺の惠亮の請に依つて、「始置延曆寺年分度者二人。其一人爲賀茂神、可試大安樂經、加試法華經金光明經。一人

爲春日神云々」(三代實錄)とある。同種類の記録はなほ少からず見え、神佛習合の思想は年と共に盛になつてゐる。然

し習合思想に反對して、神は佛教を喜ばれないとする思想も中々有力であつて、伊勢神宮について見ると、光仁天皇

の寶龜十一年二月、「神祇官言。伊勢太神宮寺。先爲有崇遷建他所。而今近神郡其崇未止。除飯野郡之外移

造便地者。許之」(續紀)とあり、嵯峨天皇の弘仁七年六月に「伊勢大神宮司從七位下大中臣朝臣清持。有犯穢。并

修佛事、神祇官ト之。有崇。科ニ大祓解見任(類聚國史)といふ事もあつた。賀茂神社についても、延喜式に「凡鴨御祖社南邊者、雖在四至之外。濫僧屠者等。不得居住」とあるのに依つて一般を推す事が出来よう。かくの如く神佛習合の思想と反習合の思想とは、相對立して流れてゐたのである。而して延喜式の齋宮・齋院についての規定は全く反習合の思想に依つて定められたものである。源氏物語には齋宮及び齋院が取扱はれて居り、これに關聯して、伊勢神宮、賀茂神社に對する心持、態度等が記るされて居るのであるから、先づ齋宮・齋院についての定めを一瞥しておかう。延喜式の齋宮の條には、忌詞として

凡忌詞。内七言。佛稱ニ中子。經稱ニ染紙。塔稱ニ阿良良岐。寺稱ニ瓦葺。僧稱ニ髮長。尼稱ニ女髮長。齋稱ニ片膳。外七言。死稱ニ奈保留。病稱ニ夜須美。哭稱ニ鹽垂。血稱ニ阿世。打稱ニ撫。犬稱ニ菌。墓稱ニ蟻。又別忌詞。堂稱ニ香燃。優婆塞稱ニ角管。

とあり、また

凡寮官諸司。及宮中男女。修佛事。和(イ私)奸密婚者科ニ中祓。

とある。伊勢の齋宮及びその従者等は、佛事を修してはならぬ事は勿論、「佛」「經」「僧」「寺」等の語を口にすることも禁ぜられて居たのである。賀茂の齋院は大體、齋宮に準ずる事になつて居たが、その忌詞は右の外七言だけであつたから、佛教を拒否する程度は、齋宮よりもやゝ輕かつたやうである。さて齋宮の選定は、延喜式に

凡天皇即位者。定伊勢太神宮齋王。仍簡ニ内親王未嫁者ト之。若無親王者。依世次。簡ニ定女王ト之。訖即遣勅使於彼家。告示事由。神祇祐已上一人。率僚下。隨勅使共向。卜部解除。神部以木綿着賢木。立殿四面及内外門(略)

とあり、齋院も亦これに準ずる事になつて居る。かくの如く齋宮・齋院は未婚の内親王又は女王の中から簡んでトに依つて定めるので、その當人が希望して任ぜられるのではない。而してその在任中は、前記の如く佛教と堅く絶縁するやうに定められて居たのである。然し神に仕へる事は、自身の轉迷開悟、安心立命といふ如き宗教的要求を滿たすものではない。否さやうな宗教的要求を捨てる事が要求せられて居たのである。其故に自身の後生を考へ、救済を願ふ人々は、當然深い苦悶に陥らねばならなかつたのである。清少納言や紫式部が宮仕へをして居た頃に、賀茂神社に仕へて居られた大齋院選子内親王が

加茂の齋いつきときこえける時に、西に向ひてよめる

思へども忌むとて言はぬことなれば其方に向きてねをのみぞ泣く(詞花集)

と詠ぜられたのは、實にこの苦悶を表はされたものである。

さて源氏物語を見ると、齋宮後の秋好中宮につき添うて伊勢に下つて居られた六條御息所齋宮の御母は、歸京の後間もなく重く病まれると、

「罪深き所に年頃經つるも、いみじう思して尼になり給ひぬ(薄標三九二)

とある、はじめ御息所は光源氏との關係が到底圓滿には進み得ない事情に立ち至り、而も御身分上簡單に手を切ると云ふ譯にもゆかず、進退ともに谷まられた。その頃その姫君が齋宮に定まつたが、若い姫君を遠くへ旅立たせるのも心配であつたので、思ひ切つて伊勢へ下られたのである。歸京の後も源氏との關係は以前から経緯もあつて、到底圓

源氏物語に現はれた神

滿には進み得なかつたのであり、又重い病に罹ると出家するのが普通であつた當時の習慣等を思ひ合はせると、御息所が尼になられた事その事については、別に問題にする程の事も無いが、佛教禁斷の齋宮寮を「罪深き所」とし、その罪深い所に長年暮した事を、いみじく思召されて尼になられた、といふ其の理由は、今日から見れば、かなり注意すべきものであらうと思ふ。而も此は決して口實ではなかつたのである。即ち御息所はまだ伊勢に居られた頃に、源氏に送られた御文にも「罪深き身のみこそ、また聞えさせむことも遙かなるべければ云々」と云つて居られる(須磨三二)「罪深き身」と云はれたのは、花鳥餘情に「齋宮にては、佛經など手にふれぬ事を、罪ふかしとはいふなり」と注してある通りである。更に御息所が亡くなられてから十八年目に、源氏の嫡妻紫の上が物の怪の爲に深く悩まされたが、修法に依つて、辛うじて物の怪の正體を捕へて見ると、其は御息所の死靈であつた。さて此の死靈は源氏に對して、自分の罪の消えるやうに佛事供養をしてほしいと依頼し、また其の姫君の秋好中宮(齋宮)に、

「齋宮におはしまし頃ほひの御罪輕むべからむ功德のことを、必ずせさせ給へ(若菜下一四二)

と傳言してほしいと源氏に依頼してゐる。こゝに齋宮在任時代の御罪とあるが、秋好中宮は齋宮時代に別に罪惡を犯して居られた譯ではない。たゞ規則に依つて、止むを得ず佛教から遠ざかつて居られたといふだけであるが、それを罪と云つてゐるのである。而も齋宮時代から廿年も経た後に、母の亡靈が現はれて、此の如き事を云ふ事にしてゐるのは、以つて齋宮の生活が如何に罪深いものと考へられて居たかが知られる。中宮は母御息所の噂をほの聞かれるにつけて、尼にもなりたいとは思はれるけれども、簡単に實行する事も出来ない御身分であるから、「功德のことを」専ら思ひ營まれ、源氏も協力して法華八講などを行つて居られる(鈴虫の終)。佛教と絶縁した生活を罪深しと考へる事は、

齋院に於いても同様であつて、權の齋院は任を辭せられると、

「年頃しづみつる罪失ふばかり、御行ひを、とは思し立てど（俄に尼になるのも世間體が悪いので、）いたう御心づかひし給ひつゝ、やうく御行ひをのみし給ふ」（權、四九五）

のであり、遂に尼になられて「いみじう勤めて、まぎれなく行ひに染み給ふ」のである（若菜下、一五九）。なほ齋院については、枕草子にも

「宮仕所は、うち、后宮（中略）。齋院は罪深かけれどをかし」（春曙本卷十。日本文、學大系本七〇七頁）

とある。前記選子内親王の御歌等と思ひ合はせると、齋宮や齋院の生活を罪深しと見るのは、源氏物語だけの思想ではなくて、この時代の共通的な考へ方であつたやうである。

處で齋宮や齋院の生活を罪深しと見た結果、神をば疎略にしたかと云ふと、さうではない。葵、賢木等の卷に見える齋宮の潔齋、齋宮群行の事、また帶木、夕顔、葵、藤の裏葉、若菜、幻、總角等の卷に見える齋院の潔齋や賀茂の祭等の記述を見ると、傳統的な公の行事として、盛大に且つかなり嚴肅に行はれて居た事が知られる。然し其處に現はれて居る神に對する氣持は、主として畏敬の念であつて、神に對して消極的にその御心に逆はないやうにと畏れ慎んで居るが、神を信賴し、神に依つて生活に光明を得ようといふ如き積極的な氣持は見受けられない。この點も今日から見れば少しく異様にも感ぜられる事である。

尤も伊勢神宮は特殊な神社であつて、既に平安朝の初期に、上御一人だけがお祭りになる神社として、その他は皇太子や皇后でも、任意に參詣したり幣帛を奉つたりする事は堅く禁ぜられて居た。即ち皇太神宮儀式帳には「禁斷幣

帛。王臣家并諸民之。不_レ令_レ進_二幣帛_一。若_レ以_二欺事_一。幣帛進人違波。准_二流罪_一勘給之」とあり、延喜式には「凡王臣以下。不得_レ輒供_二大神幣帛_一。其_二后皇太子_一。若_レ有_レ應_レ供者臨時奏聞」と定められてゐる。従つて伊勢神宮は他の一般の神社と同日に談すべきでないのであり、賀茂神社も嵯峨天皇の弘仁元年以來、伊勢神宮に準ずる崇敬を受けられる事になり、従つて著しく國家的な神としての性質を加へられ、それだけ一般民人との關係は薄らいだやうである。其故に伊勢神宮や賀茂神社は、特別な神社として見るべきものであつて、専ら畏敬して居るのは當然であるとも言ひ得る。然し神に對する畏敬の念は、上古以來の神祇觀の極めて重要な要素であつて、神をば近づき難く親しみ難いものとして専ら畏敬するのは、伊勢の大御神や賀茂の大神に對する場合だけではなく、これが一般の神に對する傳統的な考へ方であつたのである。本居宣長は上古の「神」を總括的に解説して

「凡て迦微_{カミ}とは、古ノ御典等に見えたる天地の諸の神たちを始めて、其を祀れる社に坐_イ御靈_{ミタマ}をも申し、又人はさらにも言_イず、鳥獸本草のたぐひ、海山_{ウミヤマ}など、其餘_{ソノホカ}何にまれ、尋常_{ヨソツネ}ならず、すぐれたる德_{トク}のありて、可畏_{カシコ}き物を迦微_{カミ}とは云なり（すぐれたるとは、尊_ミきこと、善_{ヨシ}きこと、功_{イサ}しきことなどの優れたるのみを云に非ず。惡_{アク}しきもの、奇_{オヤシ}しきものなども、よにすぐれて可畏_{カシコ}きをば神と云なり。さて人の中の神は……又人ならぬ物には、雷は常にも鳴_ナ神、神鳴_{ミナ}りなど云へば、さらにも云はず。龍、樹靈_{コノミ}、狐などのたぐひも、すぐれてあやしき物にて、可畏_{カシコ}ければ神なり……又虎をも狼をも神と云へること、書紀、萬葉などにも見え……海山などを神と云ふことも多し。そは其御靈_{ミタマ}の神を云に非ずして、直_{タジ}に其海をも山をもさして云へり。此らもいとかしこき物なるが故なり）（古事記傳卷三）

と云つてゐる。この説は上古のわが神祇の本質を闡明したものととして、多くの學者に支持せられて居るものであるが、畏怖すべきものを神としてこれを祭るのであつてみれば、神に對しては、その怒に觸れる事の無いやうに、崇を

蒙る事の無いやうにと、消極的な畏怖の念が強く動くのは當然と云はねばならぬ。而して此の如き畏怖の念は、日常生活に於いては、穢を忌み憚る風習に最もよく現はれて居ると思ふ。光源氏が夕顔の死に遇つて、気分も悪くて臥して居られる所へ、頭中將が御所から迎に來られると、源氏は

（乳母の病氣を見舞に行つて、思ひの外に其處の下人の死の穢に觸れたので）、神わざなる頃は、いと不便なる事と思う給へかしこまりて（御所へも）え參らぬなり」（夕顔 一〇〇）

と云つて居られる。死者の名は偽であるが、死の穢に觸れたのは事實である。頭中將に對して「立ちながら此方に入り給へ」と云つて、下へ坐らせないのは、穢が中將にも移る事を避ける爲である。薫大將が浮舟の失踪後（表面は死して、葬式も行つた）、宇治の邸を訪ねられた時、

「（浮舟は實際に其の邸で死んだのでは無いから）穢らひといふ事はあるまじけれど、御供の人目もあれば、（御殿にも）上り給はで、御車の榻を召して、妻戸の前にぞ居給へりけるも見苦しければ、いと繁き木の下に苔をおましにして、とばかり居たまへり」（蜻蛉 七五七）

とあるのは、前の源氏の場合とは違つて、實際には穢は無いけれども、人目を憚つて穢を避ける體にして居られるのである。以つて穢をば憚り避けねばならないものとして、如何に嚴重に避けてゐたかが知られる。桐壺帝は桐壺更衣が亡くなれると、第二皇子（後の光 源氏）を御心ならずも退出せしめられ（桐壺 九）、諒闇の年には神事は中止せられてゐる

（槿 四九〇）等、穢を避ける事は頗る嚴肅に行はれてゐる。而して此等の場合に、積極的に清淨を尊ぶと云ふよりも、消極的に神の怒を蒙らないやうにと畏れ憚る感情が遙に強く働いて居る事は、改めて云ふにも及ばないであらう。

三

以上記した如く、一般に神をば近づき難く親しみ難いものとして畏れ敬ふのが傳統的な觀念であるが、源氏物語には一面に、もつと近づき易く親しみ易い神も描かれて居る。住吉の神と八幡の神がこの方の神の代表である。特に住吉の神への信仰、住吉の靈驗は源氏物語の組織に重大な關係を有つてゐる。

光源氏が須磨へ移られた翌年の三月朔日、うら／＼と風ぎ渡つた海岸へ出て上巳の祓をし、「八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ」と詠ぜられると、如何した事か、今まで晴れ渡つて居た海面が一變して大暴風雨になり、雷は襲ひかゝるやうに鳴りひらめき、高潮は源氏をその住宅と共に引き浚つて行きさうな勢を示し、夜になると夢の中に怪しい者が現はれて、源氏を誘うて行かうとする。かうした状態が十餘日も續いたので源氏もほとほと困窮せられ、いろ／＼の幣帛を捧げて、

「住吉の神、近き境をしづめ守り給へ。まことに迹を垂れ給ふ神ならば助け給へ。」(明石、三四二)

と多くの願を立てて祈願をせられ、従者等も「諸聲に佛神を念じ奉り、「神佛明らかにましますば、この憂へやすめ給へ」と住吉社の方に向つて、さま／＼の願を立てて祈り、源氏も亦「海の中の龍王、萬の神達に願」をたてられると、夜になつてから、漸く風も静まつた。海士どもが「この風止まざらましかば、潮のぼりて残る所無からまし。神の助けおろかならざりけり」等と云ふのを聞かれて、源氏は

「海にます神のたすけにかゝらずば潮の八百あひにさすらへなまし」(明石、三四二)

と感謝して居られるが、その「海にます神」は海の龍王か、住吉の神か、又は其の他の神か明でない。さてその夜源氏の夢枕に故桐壺院が立ち給うて「など、かく怪しき所にはものするぞ」と仰せられて、源氏の手を取つて引き立てられ、

「住吉の神の導き給ふまゝに、早やこの浦を去りぬ」(明石、三四三)

と仰せられる。そして其の翌朝、明石の入道が、神のお告に依つて、と云つて、御迎に参つたのである。

前播磨守明石の入道は、早くからその一人娘を、都の然るべき貴人に添はせたいと念願し(若紫、一一八)、十八年來「年に二度(娘を)住吉に詣でさせ」、「神の御しるし」をひそかに期待して居た(須磨、三三四)が、源氏が須磨に移られると、娘を源氏に奉りたいと願ふやうになつた(須磨、三三三)。さて三月朔日に靈夢を蒙つて船の用意をし、やがて「神のしるべ」

のまゝに風の風ぐと共に須磨へ迎に参つて、この趣を申上げると、源氏は「まことの神の助にもあらむを、背くものならば、又これより勝りて人笑はれなる目をや見む」と思ひ、「夢の中にも、父帝の御教ありつれば、又何事をか疑はむ」と思ひ定めて、入道の船に乗られると、不思議な風が吹き出でて、忽ち明石の浦へ着かれた。入道は源氏が船から車に乗り移られる時、御有様をほのかに見奉ると、嬉しさ有り難さに、老も忘れ齢も延びる心地がして、「まづ住吉の神を、かつく、拜み奉る」のであつた(明石、三四六)。こゝに住吉の神の冥慮が明に大寫しにせられてゐる。而して源氏の夢想、明石の入道が受けた靈告を思ひ合はせると、嵐を止めて、源氏を明石へ導かれたのは、全く住吉の神の御計らひであつた事が示されてゐる。

源氏はやがて入道の娘と契を結ばれ、此の間に姫君が生れられた。此について、源氏は嘗つて宿曜の道の人が、「(源氏には)御子三人。帝、后必ず並び出で給ふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし。」「中の劣り腹に、女は

いでき給ふべし」と勘へ申した事があつた事を思ひ合はせられると、いま生まれられた此の姫がやがて后になられるのであると思はれ、過去、現在、未來と思ひ合はせられて、

「住吉の神のしるべ。まことにかの入道の娘も、世になべてならぬ宿世にて、ひがくしき親（入道）も、及びなき心をつかふにやありけむ」（潯標、三七七）

と思はれた。源氏は先に歸京の時に、使を以つて住吉社に御禮を申上げられたが、こゝに改めて自ら参拜し「荒かりし波のまよひに、住吉の神をばかけて忘れやはする」等を詠じて、心から感謝の意を表せられた（潯標、三八九）さて此の姫は成長の後、春宮の女御として入内せられる。御付添として参つた明石上（入道の女で姫の生母）は、「まことに住吉の神（の御計らひ）も、おろかならず知らる」るのであつた（藤裏葉、七六七）。女御はやがて男御子を産まれ、すべてが理想的に進んでゆく。源氏は、

「浦づたひの物騒がしかりし程、そこらの御願ども、皆はたし盡し給へれども、なほ世の中にかくおはしましてかかる色々の榮えを見給ふにつけても、神の御助は忘れ難くて、對の上（紫の上）も、具し聞えさせ給ひて、詣でさせ給ふ」（中略）

たれかまた心を知りてすみよしの神世をへたる松にこととふ（源氏）。（中略）

住のえを生けるかひあるなぎさとは年經るあまも今日や知るらむ（明石上の母尼）。（中略）

昔こそまづ忘れねすみよしの神のしるしを見るにつけても（同）。（下略）（若菜下、九）（九一—一〇二）

等と記るされてゐる。住吉の神に對しては、或は風波を靜めて助け給へと祈り、或は我が娘を理想的貴人に縁付かせ

て、子孫を繁榮せしめ給へと祈り、神はその願ひに應じて、苦を抜き樂を與へ給うて、人々を指導し擁護し給うのである。而して父性愛の權化とも申すべき桐壺院の御魂が、御自ら源氏を救はうとはせられず、住吉の神の思召しに従へと仰せられた事は、頗る注意すべき事であつて、こゝに住吉の神の慈愛が深く示されてゐると思ふ。此の如き住吉の神に對する信賴の情は、賀茂の神等に對する畏敬の念とは、甚だ趣を異にするものであるが、その相違は、源氏物語に謂ふ如く、住吉の神を「迹を垂れ給ふ神」と信じて居た事に依るのであるまいか。

因に住吉の神は底筒男・中筒男・表筒男の三柱の和魂及び神功皇后を祀つたと傳へられ、古くから海路を支配せられる神と信ぜられて居た。其故に遣唐使等は幣帛を捧げて、海路の安全を願ふのが例になつて居り、萬葉集には石上乙鷹が土佐へ流された時、乙鷹の妻らしい人が船路を擁護し給ふやうに祈願した歌が出てゐる。かくして住吉の神は早くから一部の人にならり親しい神であつたのであるが、平安朝には佛教と習合せられ、一層一般人に親しい神になられたのである。佛教との習合については、貞觀八年二月「遣_二十一僧_一。向_レ於_二攝津國住吉社_一。轉_レ讀金剛般若經三千卷。般若心經三萬卷。以奉_二謝神心_一」(三代實錄)とあるのが管見に於いては最も古い。その後、法華驗記に、道命阿闍梨が法華經を讀誦するのを、住吉明神が金峯山藏王、熊野權現、松尾明神等と共に隨喜して拜聽せられ、且つ松尾明神に向つて「日本國中。雖_レ有_二巨多持法華人_一。以_二此阿闍梨_一爲_二最第一_一。聞_二此經_一時。離_二生々業苦_一。善根增長。仍從_二遠處_一每夜所_レ參也」と云はれると、松尾明神は「如_レ是、如_レ是」と言はれたといふ話が出てゐる。道命阿闍梨は紫式部と同時代の人である。又式部の同僚赤染衛門はその子泉守大江舉周が重病に罹つた時、住吉の神に歌を奉つて延命の祈願をし、靈驗を蒙つた例がある。即ち

學周、和泉の任はてて罷り上るまゝに、いと重く煩ひ侍りけるを、住吉の祟りなどいふ人侍りければ、みてぐら奉り侍りけるに書きつけける。

赤染衛門

頼みては久しくなりぬ住吉のまつこのたびはしるし見せなむ(後拾遺集)

大江學周の朝臣、おもくわづらひて限りに見え侍りければよめる

赤染衛門

かはらむと祈る命は惜しからでさても別れむことぞ悲しき(詞花集)

と。右の二首は同じ時に奉つたもので、赤染衛門集には、二首の間に「千代へよとまだみどり子にありしよりたゞ住吉の松を祈りき」を入れて三首を並べ出し、その次に「(これらの歌) たてまつりての夜、人の夢にひげいと白き翁、このみてぐらをみながら取ると見て、(病)をこたりにき」と註してある。この靈驗談は今昔物語や袋草紙にも出てゐる話であるが、源氏物語に出てゐる住吉の神への信賴は、赤染衛門の心持よりも一段と深いものがあり、神佛習合の思想に於いても、源氏物語の「迹を垂れ給ふ神」と云ふ語は法華驗記に現はれて居るものよりも、格段に進んだものであつて、住吉の神については、源氏物語の思想信仰は注意に値するものと思はれる。

次に八幡の神については玉鬘卷に出てゐる。即ち玉鬘は大夫監の強迫的求婚を避けて都へ逃げ上つたが、久しく都を離れて居た爲に、頼るべき人もなくて途方に暮れた時、乳母子の豊後介は、

「神佛こそはさるべき方にも導き奉り給はめ。近き程に、八幡の宮と申すは、彼處にても参り祈り申し給ひし松浦、宮崎同じ社なり。かの國を離れ給ふとて、多くの願立て申し給ひき。いま都にかへりて、かくなむ御しるしを得てまかり上りたると、早く申し給へ」(玉鬘、五五五)

と勸めて玉臺を石清水八幡に參詣させ、更に「うちつぎては佛の中には、長谷なむ日の本の中には、あらたなるし顯はし給ふと、唐土にだに聞えあなる。まして我が國のうちにこそ。遠きさかひとでも、年經給ひつれば、わか君をばまして恵み給ひてむ」と云つて、長谷に參詣させてゐる。而して長谷に於いて、玉臺の昔の侍女で、今は源氏に仕へてゐる右近に遇ひ、玉臺はやがて源氏の手元へ引取られて幸福な生活に入る事になる。即ち八幡神並に長谷觀音の御利益を目のあたりに蒙る事になつてゐる。さて右の豐後介の言葉の中に、筑紫に居た頃、松浦、宮崎の宮に祈願をしたとあるが、源氏物語中、宮崎宮については、右記の豐後介の語以外には見えないやうであるが、松浦宮については、大夫監は「君に若し心たがはば松浦なる鏡の神をかけて誓はむ」と愛を誓ひ、玉臺の乳母は「年を経ていのる心のたがひなば鏡の神をつらしとや見む」と拒絶して居り、九州を逃げ出る時にも「松浦の宮の前の渚」と乳母の長女に別れるのが名殘惜しく思はれた等と書いてある。宮崎の宮が八幡宮である事は言ふ迄もないが、松浦の宮は水鏡や拾芥抄には藤原廣嗣の怨靈を祀つたものとしてゐるが、源氏物語では八幡と見てゐるのである。さて前記の如く「神佛こそは云々」と云つて、石清水八幡と長谷の觀音とを相並べて出し、而して石清水へ詣る時には、豐後介の親が懇意にして居た「ごし」(五師ではなく、御師である。宿坊の主人の如きもの)と稱する僧に通知して、其の手引に依つて參詣して居るが、其は長谷に詣でた時に、棒市の宿坊で「家あるじの法師」に手引をしてもらふのと同じ趣である。即ち八幡と觀音とを殆ど同じ様に信仰して居るのであつて、人々が親しい神として信奉して居る點に於いては、八幡の神は住吉明神に勝るものがあるやうである。

八幡の神は早く奈良朝時代に佛教と習合せられ(東大寺八幡宮等)、延暦十七年の太政官符に八幡大菩薩の號が見え、僧形の

八幡像も早く出来て居て、神々の中で、最も早く且つ深く佛教と習合せられた神である。源氏物語に於いては、八幡の大神に關する叙述は、住吉明神よりも少く、又物語の内容に就いての關係も淺いが、八幡の神への信賴は、住吉の神に對するよりも深いやうに見えるのは、垂迹思想に於いて八幡の神の方が一步進んで居られたからであらう。

以上の四神は、源氏物語の筋に相當の關係があり、且つ神名の明かな神々であるが、この外に注意すべき神として春日明神がある。源氏は玉鬘を引取つて、娘として世話をして居られたが、玉鬘をば尙侍として宮仕に出さうかとも思ひ、其について、玉鬘は本來藤原氏であるが、「氏神の御つとめ」など、從來は娘として深窓に籠つて居たから、人目につかぬ様に紛らはして來たが、源氏の娘として宮仕に出ては氏を僞る事になり、「春日の神の御心違ひぬべく」思はれるとある(行幸、六七二)。又紅梅大臣がその長女を春宮に奉るのについて、「春日の神の御ことわりも、我が世にや若し出で來て」、父が遺憾に思はれた事を慰め申す事もあらうかと思つて、「心のうちに祈りて」、女を奉つたとある(紅梅、三四五)「春日の神の御ことわり」とは、皇后は藤原氏から出すやうにと云ふ春日明神の仰せを指すやうである。なほ行幸の卷の初に冷泉院が大原野神社(春日の神を都の近)に行幸せられた事が記るされてゐる。かくの如く、藤原氏の氏神として、皇室の御崇敬も厚かつた春日の神について若干の記述があるが、佛教との關係については觸れてゐない。右の外に、神名の記るされてゐる神は、大體左の如くである。

(一)五條の夕顔の家に居た女房等が、急いで打橋めくものを渡らうとして、衣の裾を物に引きかけて、よろばひ倒れ橋から落ちさうになつて、「いでこの葛城の神こそ、さかしうしおきたれ」とむつがる(夕顔、八四)

(二)あの女は染織や裁縫もまことに上手で「立田姫」といはむもつきなからず、たなばたの手にも劣るまじく」あつた、と云ふと、一人が「そのたなばたの裁ち縫ふ方をのどめて、長き契にあえまし、實にその立田姫の錦には、又しくものあらじ」云々といふ(帶木 四一)

(三)「この頃の紅葉を言ひくたさむは、立田姫の思はむこともあるを云々」(少女 五四三)
 これらは神名を引き合ひに出したまでで、尊敬してゐる様子は見えない。

四

前節に「神佛」「佛神」といふ語を二三引用したがこの語の用例は他にも少くない。今管見に入つたものを、まとめて列挙して見よう。

神佛かみほとけ

(1) 須磨で暴風雨に悩まされた時、源氏の従者等は「神佛明にましますば、この憂やすめ給へ」と祈る(明石 三四一)
 (2) 明石の入道は、源氏を明石へ迎へて、源氏の君が假にもこんな所へ來られたのは、我が年來の念願を「神佛の憐みおはしまして」取り計らひ給うたのかと存じ奉る、と云ふ(明石 三五三)

(3) 末摘花の侍女等は源氏が通ひ初められた時「おぼえず神佛のあらはれ給へらむやう」に思つた(蓬生 四〇一)

(4) 玉鬘は四歳の時に筑紫へ下つたが、乳母等は玉鬘の母の夕顔の行方を知りたいと思つて「萬の神佛に」願つた

(玉鬘 五四六)

(5) 玉鬘に求婚した大夫監は「國の中の神佛は、己になむ靡き給へる」と我が威勢を誇示する(玉鬘、一)

(6) 豊後介は、玉鬘の供をして都へ上つたが、頼るべき所も無くて當惑し、「神佛こそは、さるべき方にも導き奉り給はめ」と云つて、姫を石清水及び長谷へ參詣させる(玉鬘、五五五)

(7) 柏木は、是非とも女三宮に直接に會つて、意中を申し述べたい。「神佛にも思ふ事申すは罪ある事かは」と云つて、小侍從に仲介を懇願する(若菜下、一三三)

(8) 柏木は物思ひの爲に重い病になる。願れば「神佛をもかこたむ方なく、誰を恨む事も出来ないと思ふ(柏木、三)

(9) 按察大納言は、故北の方の腹に姫君が二人あつたが、更に「神佛に祈りて」今の北の方の腹に男君を設けられた(紅梅、三四三)

(10) 薰大將は望外の機會に、かねて心にかけて居た女一の宮をかいま見る事が出來て「いかなる神佛のかゝる折見せ給へるならむ」と喜ぶ(蜻蛉、七六五)

ほむなる
佛神

(一) 須磨の暴風雨の時、源氏の從者等は、我が命に代へても源氏を救ひ奉らうと「諸聲に佛神を念じ奉る」(明石、一)

(二) 明石の入道は、源氏を明石に迎へ、娘を源氏に奉らうといふ本望を達したいと思つて「佛神をいよく念じ奉る」(明石、三四八)

(三) 明石の入道等は、娘を源氏に奉るべき機會が近づいたのを嬉しく思ふが、一方には「目に見えぬ佛神を頼み奉りて、人(源氏)の御心をも、(娘の)宿世をも知らで」など、色々思ひ亂れた(明石、三五九)

(四)明石の入道は、娘が源氏に招かれて都へ上るのについて、自分は昔から「佛神をたのみ聞えて」、娘の將來についての希望は捨てなかつた云々と云ふ(松風、四四五)

(五)源氏は自身を顧みて、若い頃の色好みは「思ひやり少き程のあやまちに、佛神も免し給ひけむ」と思ふ(薄雲、四八一)

(六)玉鬘の乳母等は、玉鬘を早く都へつれて行きたいと思つて「佛神に願を立てて」祈願した(玉鬘、五四八)

(七)右近は長谷で玉鬘に遇ふ事が出来たのについて、私が御目にかゝりたいと願つて居たのに對して「佛神の御みちびき」があつた、と喜ぶ(玉鬘、五六九)

(八)明石の入道は、その外孫に當る東宮の女御が、男御子を産み奉られたと聞いて、これでもう思ひ残す事は無くなつたから、俗世間との關係を斷たうと云つて、「佛神を頼み申して」、山奥へ姿を隠した(若菜上、六四)

(九)源氏が明石の入道の願文を開いて見られると「オ々しく、はか／＼しく、佛神も聽き入れ給ふ」やうに書いてあつた(若菜下、九八)

(十)紫の上が病になつたので、源氏は「佛神にも(紫の上の)御心ばせの有りがたく、罪輕きさまを申しあきらめさせ給うて病氣平癒を祈られた(若菜下、一二九)

右の「神佛」と「佛神」との用例を比較して見ると、別に兩語の間に區別があるらしくも見えない。更に「神」と「佛」との間にすらも差別を設けなくて崇敬の對象として、神と佛を殆んど同様に仰いで居る事が知られる。即ち神佛習合の思想が既に著しく進展して居て、其は殆ど一般的常識になつて居た事を示して居る。而して此の傾向は病氣平癒等の祈願に於いても見受けられる所である。二三の例を挙げると、

(一)夕顔の死後、源氏は心身ともにいたく衰弱して病み臥せられたので、桐壺帝をはじめ人々は深く心配せられて「御祈り、かたがたに隙なくのゝしる。祭、祓、修法など言ひ盡すべくもあらず」(夕顔、一〇五)

(二)大暴風雨が起つた時、都では「いと怪しきもののさとしなりとて、仁王會など行はれた様子であり、須磨では、前記の如く、源氏等は佳吉の神を始め、諸の神佛に、その鎮靜を願つてゐる(明石、三四一〇、三四二)

(三)桐壺の御方(後の明石中宮)の御産が近づくと、「御修法不斷にせさせ給ふ。寺々社々の御祈りはた數も知らず」

(若菜上、
五八)

(四)薰大將は宇治の大君の病氣平癒を願つて「所々に御祈りの使出したてさせ給ひ」祭、祓、萬に至らぬ事なくし給ふ(總角、五一六)

(五)浮舟の失踪後、匂宮が病み臥せられると、帝をはじめ人々は深く心配して「修法、讀經、祭、祓と道々に騒ぐ」(蜻蛉、七四九)

同様の例は他にも少くない。かやうな場合の祭、祓は多く陰陽師が行ふので、道教的名ものであるが、道教も傳來以來久しくなるにつれて古神道と混交して區別がしにくい様になつてゐる。而して此の如く、病氣平癒、安産、開運、或は天變地異の鎮靜など、同一の目的の爲に佛菩薩等に讀經し修法すると共に、神に對して祭を行ひ祓を行ふ事は、當代に於いては何等珍らしい事ではなく、寧ろこれが普通の事であつた。讀經、修法と祭、祓とは本來性質の違ふものであるが、これを行ふ人、又は行つてもらふ一般人にとつては、さやうな差異は問題ではない。従つて自分の願望を達成せしめられる神と佛は、崇拜の對象として自然に類似して来る。「神佛」「佛神」と云ふ如き語は、此の如き社

會一般の共通心理から自然に生れ出たものであると思ふ。而してこの場合注意すべきは、佛の特性である慈悲の觀念が神の上に移つて、神の性格が佛に近づき、其處に「佛神」「神佛」の觀念が成立して居る事である。而してかやうに變化した神の觀念は、その後——神佛が分離せられた現代に於いても、神の觀念の根柢として、多くの人々の奉じてゐる所のものである事である。

五

神佛習合の思想は奈良朝以來、年と共に盛になつて來てゐる。源氏物語に現はれてゐる所を見ても、前記の如く、佛との習合を拒否せられると信ぜられた神もあるが、其は寧ろ例外的で、大勢は習合の一路を進んで居る如くに見受けられる。然しこれは神佛關係の一面であつて、他面には神と佛との間になほ重大な差違があり、更に到底佛と習合する事は出来ないと思はれる神も少くないのである。

光源氏が明石から歸京せられた年、内大臣に任ぜられて、再び榮華の生活に入られたので、その秋、住吉神社へ「願ども果」すために參拜せられたが、源氏の一行は、住吉の「渚に滿ちて、いつくしき神寶を持て續け」「樂人、十列など装束を整へ、かたちを擇」んで善美を盡して居られた。丁度その時偶然にも、あの明石人（明石入 道の娘）も住吉へ詣で、源氏の一行の參進を海上から遙に眺めた。明石人は

（源氏の君と相並んで）數ならぬ身の、聊のことせむに、神も見入れ數まへ給ふべきにもあらず（潯標、三八九）

と思つて、その日は難波へ引き返し、次の日に「程につけたる願どもなど、かつぐ果し」たのであつた。一方、源氏

は豫定通りに參詣して

「夜一夜、いろ／＼のことをせさせ給ふ。まことに神のよろこび給ふべき事をし盡して、來し方の御願にも打添へ、有りがたきまで遊びののしり明し給ふ」(譯標、三八九)

とある。この叙述には、明石人のつましやかな性質の一端と、返り咲きせられた源氏の大きな勢力の一面とを對照的に現はさうとする作者の意圖もあるやうではあるが、然し一方には權力富力にまかせて、神の喜び給ふ事をし盡すと云ひ、一方には、さやうな時に、つまらぬ者が少々、の事をしても神は認めて下さるまいと云つて居るのは、神をば著しく人間的に考へて居るのであり、その考も頗る物質的であつた事を示して居る。また明石の入道は山に身を隠さうとして、京の娘に文を送つて、御身が理想の境遇に達した時に、自分が住吉の神に立てた願を果してほしいと云つたが(若菜上、六六)、やがて入道(若菜下、九八)の娘と源氏との間に出來た娘は女御となられ、その第一皇子は春宮に立たれ、明石の入道の理想が實現する事になつたので、源氏は入道の願を果さうと思つて、その願文を開いて見られると、源氏の如き權勢の人でなければ果す事が出來ないやうな大層な事が書きつけてあつた。而して源氏は神に對して入道の願以上の事をせられたとある。抑と神に祈願をする時には、かく／＼の願ひを満足せしめられるならば、かく／＼の御禮をしますと誓約するのが例であるが、此の如き物質的な交換的な考へ方は、宗教的には頗る原始的な幼稚なものと云はなければならぬ。住吉の神に對して、一方には迹を垂れ給ふ神と云ひながら、一方には昔ながらの幼稚な考へ方が残つて居たのである。前記、赤染衛門が延命祈願をしたのも、單に或人が其は住吉の神の崇であると云つたので、神の宥恕を願つた迄で、別に住吉の神に對して罪の自覺があつた譯では無いやうであるが、其處にも原始的な神觀が残つ

てゐると思ふ。一體わが上古の神祇觀は、宗教的絕對性を殆ど全く缺いてゐるのであるが、その古の神祇觀の面影が、垂迹神と仰がれてゐた住吉の神にも多分に残つて居た事は注意すべき事と思ふ。

源氏や明石の入道は住吉の神を深く信奉し、玉鬘等は八幡の神を頼りにして居るが、然し其は早くから特にその神を深く尊崇して居たといふ譯ではなくて、その土地に於いて神に依頼する必要が起つたので、近くの神に願をかけた、と云ふに過ぎないやうである。従つて神に對する尊崇は一時的、便宜的なものであつたやうである。又神に對する祈願は、前にも若干の例を擧げたが、その他の場合を通じて見ても、源氏物語に現はれてゐるものは、凡て現世の安寧幸福に關するものであつて、宗教的開覺、來世の救濟等を願つては居ない。即ち一面には「神佛」「佛神」等と云つて、神を佛と同じやうに仰いで居るが、他面には昔ながらの神の觀念が失はれずに居るのであつて、事實上神と佛との間には大きな距離が在つたのである。

因に云ふ。日本法華驗記の中卷に、醍醐の僧蓮秀は法華の持者であつたが、重病の爲に辛苦惱亂して命終すると、冥土に趣き、三塗の河に至つた。時に忽然として天童が四人現はれて、蓮秀は法華の持者、觀音の加被人であるから、もう一度もとの國へ歸つて「能持妙法稱念觀音。捨離生死後生淨土」と云つてもとへ歸らしめられたが、その歸りの途中「天童二人來迎云。賀茂明神見赴冥途爲令還所遣也」と云つた。蓮秀はかくして一夜を経て蘇生したと云ふ物語が出て居る。而して今昔物語の卷十六には、この話を取入れて、初に蓮秀は「常に賀茂の御社にぞ參りける」といふ語を添へ、終りに「神に在すと云へども、賀茂は冥土の事をも助給ふ也けり」と云つてゐる。この「神に在すと云へども冥途をも助給ふ也けり」といふ語は、一般には神は冥途の事には關係せられないと信ぜられて居た事を證明するものである。

本地垂迹の思想が十分に發達すると、一遍上人が熊野權現に一百日參籠して、あらたかな御教を蒙られた如く、神をば佛と同一

視するに至るのであるが、然し其の場合に於いても、神を佛の應化として仰信する人が多くなつたと云ふ迄で、他面にはやはり昔ながらの神としての面影が残つてゐたのであつて、神の性格が全く變更せられてしまつた、といふやうには成らない、といふ事に注意したいと思ふのである。

更に神の中には、到底佛と習合する事の出来ない神がある、例へば左の如き神がこれである。

(一) 朱雀院の行幸の前に、桐壺帝の御前行はれた試樂に、源氏は青海波を舞はれたが、源氏の言語に絶する美しい姿に對して、弘徽殿の女御は「神など空にめでつべきかたちかな。うたてゆゝし」と云はれる(紅葉賀 一八二)

(二) 右の試樂の後に、桐壺帝は、源氏の餘りにも美しい御姿に、神などが見入るかも知れぬと「ゆゝしう思されて」

「御誦經など所々にせさせ給」ひ、これを聞く人々も、御尤な事と思ひ申上げる(同、一八四)

(三) 葵祭の前の御禊に、源氏は宣旨に依つて御供に参つたが、その源氏の姿を見て、槿の姫は「いとまばゆきまでねびゆく人のかたちかな。神などは目もこそとめ給へと、ゆゝしく思したり」(葵、二二〇)

(四) 源氏云く、琴は煩はしく、手の觸れにくいものである。琴を實際正しく弾き得た古人は「天地を靡かし、鬼神の心を和らげ」たが、「かの鬼神の耳とどめかたぶきそめにけるものなればにや、なまゝに學びて、思ひかなはぬ類ありける後、これを弾く人よからずといふ難をつけて、うるさきまゝに、今はをさゝ傳ふる人なしとか。いと口惜しきことにこそあれ」(若菜下、一一八)

(五) 宇治の故八宮の侍女達は、大君が薫君に會ふ様に取計らふが、大君は避けて會はない。大君の心を解しかねた侍女等は、「薫君は我々が」見奉るに、皺のぶる心地して、めでたく哀に、見まほしき御かたち有様を、(大君は) などで

いともてはなれては聞え給ふらむ。何か、これは世の人の言ふめる怖ろしき神ぞ憑き奉りたらむ」と云ふ(總角、四七三)
 (六)浮舟が忽然として失踪すると、乳母らしい女は、「あが君や、いづ方にかおはしましぬる(略中)鬼神もあが君をばえ領じ奉らじ(略中)我が君を取り奉りたらむ人にまれ鬼にまれ、返し奉れ、なき御骸をも見奉らむ」と泣き叫ぶ(蜻蛉、七八三)
 (七)失神状態になつて木の下に泣いてゐる浮舟を見付けた横川の僧都の弟子は、「鬼か神か狐か木だ、まか(略中)名のり給へ、名のり給へ」と云つて浮舟の衣を持つて引立てようとする(手習、七八五)

(八)横川の僧都は、右記の失神状態の浮舟を見て「鬼にも神にも領ぜられ、人に逐はれ、人にはかりこたれても、これ横様の死をなすべきものにこそはあめれ。佛の必ず救ひ給ふべき際なり」。しばし看護して見よう、と云つて家の中へ抱き入れ、驗者の阿闍梨は、浮舟に正氣がつくやうに「神などの御爲に、經讀みつゝ祈る」のである(手習、七八七)
 右の(一)(二)(三)(四)の神は、今日でも俗に「魔がさす」と云ふ事がある、その「魔」の觀念にほど同じいものである。
 源氏が須磨に於いて大暴風雨に遇つて、命も危くなつた事があるが、その暴風は、「海の中の龍王」が源氏に見入つて源氏を海底へ誘つて行かうが爲に起したのであつたやうに記してある(須磨、明石)。即ち源氏の餘りにも清らかな容貌を、「神など空にめでつべき」とか「神などは目もこそとめ給へ」とか云つて、讀者に豫定觀念を與へておいて、次に實際に神が見入る事にして居るのであるが、其は兎も角として、餘りに美しい人には神が見入ると云ふ事があると考へられて居たのである。なほ龍王に就いては、源氏が北山へ瘡病のまじなひをしてもらひに行かれた時、從者の一人が明石入道の娘の噂をして、入道はその娘に、理想的な高貴な人と結婚することが出来ないならば「海に入りね(海に身を投げよ)」と云つて居る、と云ふと、他の從者等は、其は「海龍王の后になるべきいつき娘ななり」と冷笑する。源氏も「何心あ

りて、海の底まで深く思ひ入るらむ底の、みるめ、ものむづかしう」等と云はれる所がある（若紫、一一八）。「みるめ」は云ふ迄もなく海松布に「見る目」を掛けて海龍王の心を指したもので、「海に入りぬ」等と云ふと、龍王に見入られて、實際に海の底へ引き入れられるかも知れないといふ怖れの心を現はしてゐる。（五）（六）（七）（八）の神は、後に横川の僧都の祈禱に依つて、實は「もののけ」であつた事が明になつたと記るしてゐる。而して『もののけ』は源氏物語に屢々出て居るのであつて、夕顔、葵の上、宇治の大君等の死は、直接『もののけ』のしわざであり、紫の上も『もののけ』の爲に危く命を奪はれる所であつた。女三の宮や浮舟の出家も『もののけ』のしわざに重大な關係があつたのであつて、源氏物語の内容は『もののけ』と密接不離の關係があるが、その一々の事實については後の機會に述べる事にして、今は『もののけ』なるものの概要を略記するに止めたい。「もののけ」の「け」は「神ノ氣」（古事記崇神天皇の條）の「氣」と同じく、「崇」の意であり、「もの」は「超人間的威力を有する或もの」、即ち「正體の明でない神」の意である。

古事記傳卷二十に「凡て物と云ふ稱は、萬々に泛くわたる中に、人を指して云ふこと多し、（たとへば、此人彼人を、此者彼者とも云ふ類なり）……それは神は神代の人なる故に……物とは云ふ」と云ひ、神代紀に葦原中國之邪鬼とある邪鬼を私記に安之岐毛乃と訓み、又神代紀に尸者をモノマサと訓んでゐる例を擧げてゐる。同二十三卷の神氣の説明の中に、「神ノ氣、物ノ氣と云へる。神ノ氣は神の崇なり。物ノ氣とは、死人又生人にまれ、崇をなすを云て……古へは物ノ氣と云しも、神ノ氣と同じことなりけむ。神を物と云しこと、上に委云へるが如くなればなり。然るを後には、此を分て、神の崇を神ノ氣と云と物ノ氣とは人の崇を云ことになれるなるべし。されど人にまれ、崇をなすは神なれば、云ともてゆけば同じことぞ」と云つてゐる。

源氏物語に於いては、前記の如く源氏は須磨に於いて不思議な大暴風雨に遇つたが、その風雨は都の方でも同じやうに荒れ狂つた。それについて宮廷では「いと怪しきもの」として仁王會など行はれる筈であると云ひ（明石三四〇）、薄雲の女院

が崩ぜられる年の春、「おほかた世の中騒がしくて、おほやけざまにものさとししげく……」（薄雲、四六八）等とある。この「もの」は「正體の明かでない神」である。「もののけ」は修法に依つて調伏して見ると、多くは人の死靈生靈であるが、「もの」はもつと廣い意味の神と解すべきであらう。なほ「もののけ」の「もの」が神である事は、平安朝時代に出来た天満宮、御霊神社、今宮神社等々の祭神の由來を思ひ合はせるならば、一層明かになるであらう。

「もののけ」は祈禱、修法等に依つて其の本體を見出し得る事もあるが、大體から云へば「もののけ」の「もの」、前記の魔の類の神は正體が明でないのが普通である。かやうな神は、もと上古人の自然や人生に對する素朴な恐怖心の投影に依つて生じたものであつて、最も原始的な神であるが、文化の進んだ後世に於いても、人間性の弱さの故に、自然や人生に對する漠然たる而も甚だ深刻な恐怖の情は容易に減少せず、従つてこの類の神も減少してゐないのである。

源氏物語に於いて、人々の生活に最も深い關係を有つてゐるのは實にこの類の神であつて、人々がかやうな神を常に深く恐れ憚つて戰々兢々として居たのは當然と云はねばならぬ。平安朝貴族の生活は表面から見ると頗る優美な華麗なものであるが、反面から見ると甚だ陰影の多い、生氣の無いものであつた。而してかやうな無氣力な暗い生活が爲されるやうになつたのに就いては、種々の原因を擧げる事が出来るが、此處に記るしてゐる正體の知れない神々の爲に常に生命が脅かされて居ると思つて居た事が、重大な原因の一つであつた事は明かな事實である。さてかやうな神は固より宗教的乃至倫理的の善惡正邪の觀念とは合致しないものであつて、人に對しては禍害を加へるのみで、幸福を齎らす事は極めて稀であると信ぜられて居たのである。従つてかやうな神は佛菩薩の垂迹などとは到底考へられない事は云ふ迄もない。即ち神佛習合の思想の及び得る範圍には自ら限界があるのであつて、凡ての神を佛に習合する事は到底出来ない事であつた事を知る事が出来る。而して佛に習合せられた神々に於いても、徹底的に習合してしま

ふ事は出来ないものであつて、昔ながらの神の性質が一面には依然として残つて居た事は前記の如くである。神佛習合の思想は鎌倉室町の時代までは年と共に進展して行つたが、江戸時代を経て明治維新に至つて、習合思想は否定せられる事になつた、その一半の理由は此處に在ると思ふ。蓋しわが神祇崇拜には、古來教祖が無く、また教義といふ程のものも組織せられずに、民族の間に自然に生長して來たものであるから、新解釋を以つて神觀等を改める事は、比較的容易であるやうに思はれる。また實際新解釋を加へ得る餘地は多分に在るのである。然し徹底的に新解釋を以つて、神觀を改めてしまふ、といふ事は、實は却つて極めて困難な事であるのである。

六

以上記した所を要約すると、凡そ次の如くである。

イ、伊勢神宮、賀茂神社等は傳統的に崇敬せられて居るが、近づき難く親しみ難い神として畏敬せられてゐる。

ロ、齋宮や齋院は規定に依つて佛教と絶縁して居られるが、かやうな生活を罪深いものと見るのが當時の一般的な考へ方であつた。

ハ、人々に親しい神としては住吉の神と八幡の神が現はれて居る。人々は除災招福を願ひ、神は願に應じて拔苦與樂し給ふと信じて居る。而して住吉、八幡兩神は既に深く佛と習合せられ、住吉の神をば「迹を垂れ給ふ神」と仰ぎ、八幡の神は觀音と同じやうに信奉してゐる。

ニ、「神佛」「佛神」の語が多く見えて居て、住吉や八幡の神に限らず、一般に神佛習合の思想が著しく進んでゐる事

が見受けられる。而してその場合、「神」の觀念は「佛」の觀念の影響を受けて變化し、神は佛に類似したものと解せられてゐる。

ホ、神佛習合の思想は、非常な勢を以つて發達し流布した如く一般に考へられて居るやうであるが、此の思想の及び得る範圍には自ら限界があつた。即ち(1)神佛習合を徹底させる爲には、先づ古來の神祇觀を根本的に改めなければならぬが、其は極めて困難な事であつて、一面には既に全く佛教と習合せられた如くに見受けられる神々にも、他面には昔ながらの面影が残つて居り、(2)神々の中には、正體も分らず、名も分らぬ神が實は甚だ多く、而してかやうな神は何時何處に現はれて、人に禍害を與へるかも知れないと信ぜられたものであるが、かやうな神は到底佛と習合する事の出来ない性質のものである。

ヘ、佛と習合せられた神からは、人生に對する希望が與へられ、光明が與へられてゐるが、正體も分らぬ多數の奇怪な神からは、屢々希望を奪はれ、恐怖の深淵に追込まれてゐる。

ト、源氏物語の筋に特に深い關係のあるのは住吉の神である。而して多くの人々の生活に直接深い交渉を持ち、人々を深く支配して居たのは、正體の知れない奇怪な神々である。

源氏物語は初にも記した如く、神に對する思想信仰を根柢として組織せられたものではないから、結論と稱する程のものとは出て來ないが、而も神祇史の一斷面がかなり明瞭に示されて居る。而して此處に含まれてゐる種々の問題は、今日——神祇觀が重大な轉換を爲しつゝある所の今日並びに明日に對して、少からぬ示唆を與へるものであると思ふ。

註 一、和田英松博士「南朝三代の源氏物語の御研究」(岩波講座、日本文學)。

源氏物語に現はれた神

山田孝雄博士「連歌研究の序説」(思想、昭和二年五月號)

二、岡崎義惠氏「光源氏の道心」(日本文藝學)。

なほ源氏物語に於ける宿世觀、無常觀等については、卓見も取りまとめてあるが、其等は他の機會に發表したいと思つてゐる。

三、以下十餘行は辻善之助博士の「本地垂迹説の起源について」に負ふ所が多い。

四、横山英氏「古事記の神」(國語國文、昭和十三年十一月號)